

区の区長さんや老人会の会長さんに声を掛けると、その方たちがたくさんの方を呼んでくれたんです。先生たちも「顔を合わせたことがない人にも来ていただきたい」と驚いていました。行きたいと思っても、声を掛けてもらわないと自分から行きづらい人もいて、そのような方たちにも参加してもらえよう、地区の役員さんなどに協力を求めてきつかけをつくることも大切だと感じました。

倉岡 私の周りにも「自分もあいさつ運動したかった」と言う人がいました。そういう気持ちを大切にして、声を掛けていくことが大事ですね。

松野 そうですね。広く皆さんに声を掛けていきたいですね。

堅島 子どもの学習と重なる部分がありますね。子どもたちはやりたいと思っただら、自分でどんどん勉強します。地域と関わりたいという思いが出てくれば、自分から関係を持つととされるのではないかと思います。こちらから声を掛けるアプローチもありますが、関わりたいという意欲をかき立てるような魅力ある取り組みや活動を作っていく方が、そういうの方を引き出しやすいかもしれません。

井下 魅力的なものがあるって、そこで集まったら関係性が生まれて、関係性が良くなると結果がうまくいくようになって…。いい循環になりますね。

堅島 誘うのも全く知らない人より、知り合いから誘ってもらった方がいいかもしれ

れません。

松野 倉岡さんよくおっしゃってますよね。「私も行くからあなたも行く」という誘い方がいいって。

倉岡 実際「私も行くから一緒に」と誘われて参加したことがあります。参加してみたら楽しくてもう少しやってみようかなという気持ちになりました。



倉岡壽雅子さん

堅島 知らないから行かないんですね。ボランティア活動にしても、知っている子は面白さがわかるから参加するけど、知らない子はあまり反応が良くないものです。一回経験するのだいぶん違いますよね。

松野 町はいろんな人で構成されているので、一人一人の持っている力がもつと発揮されれば、「まち全体が学びの場」の取り組みに近づけると思います。

倉岡 学びの場といったら「学校」、「子ども」と思っていましたけど、大人もみんな含めて、本当に「まち全体」ですよ。

松野 そういう意識が、広く浸透していくといいですね。

そしていつか、まち全体が学びの場へ



ま ち全体を学びの場へとするための取り組みの数々、いかがでしたか。

「これならば私にもできるかも」と思ったものもあるのではないのでしょうか。児童・生徒の登下校時に、「おはよう」、「おかえり」と声を掛けることも、昔取った杵柄「竹馬」や「こま回し」を子どもたちに教えることも、そこで生まれる会『話』こそが「学び」なのです。

「まち全体が学びの場」になるように取り組んでいる「コミュニティ・スクール」の推進は、2月号で進展状況を報告した町長マニフェストにも掲げられており、現在では町内全ての学校がコミュニティ・スクールとなっています。そして、コミュニティ・スクールから始まった小さな輪が『話』によって広がっていき、徐々に大きな地域の『輪』となっていくことで、座談会の中で堅島校長が述べたように、益城町は持続可能な「子ど

もたちが地域で育つ町」へとなっていくことでしょう。

皆さんの中には、会話が得意な人、料理なら教えられるかもという人、さまざまな人たちがいると思います。あなたが「先生」になることができる分野がきっとあるはず。そして子どもたちから学ぶ「生徒」になることもあるでしょう。

あなたもぜひ、「学びの場」を構成する地域の「輪」に加わるために、小さな1歩から踏み出してみませんか？

